

移動生活者の定住化と地域共同体の構築

フランス南西部におけるマヌーシュ共同体を事例として

左地(野呂) 亮子(筑波大学大学院人文社会科学研究科)

本発表は近年のフランスにおける移動生活者(gens du voyage) / ジプシー(Tsiganes)の定住化という居住をめぐる文化的・社会的変容を背景に、フランス南西部に暮らすマヌーシュ(Manouches)が定着地域において形成していった地域共同体に着目し、移動生活者社会における共同性の変容と持続について考察するものである。

戦後の都市化や国の政策による宿営の制限、そして多数派社会において変容した市場経済や社会システムへの適心の必要性から、フランスで伝統的に移動生活をおこなってきたマヌーシュは各地でキャラヴァンをとめて集住し、一年の大半を定着地で過ごすようになった。経済活動に行き詰まり困窮するマヌーシュ家族なかには宿营地からでることなく、車輪のついていないキャラヴァンに住み続けるものもいる。フランスでは彼らを「定住化した移動生活者(voyageurs sédentarisés)」と呼ぶ。このような居住をめぐる現代の変容のなかで、それまで地理的空間を限定しない柔軟な親族ネットワークにより築かれてきた移動生活者の社会空間は、一方で定住化という生活空間の制限によって固定化・縮小し、他方で地縁という新たな関係性を含みこむことになった。

フランスのマヌーシュに関してこれまでに発表された民族誌的研究においては、定住化の時代にあってもなお定住民社会とは異なった価値と規範に基づいた独自の生活世界に生きるマヌーシュの暮らしとその文化の永続性に焦点があてられてきた。しかし東欧のロム(Rom)集団や西欧の他のジプシー集団とは異なり、第二次世界大戦前後まで活発な移動生活を維持してきたフランスのマヌーシュにとって、近年の定住化はマヌーシュと定住民社会との関係性のみならず、移動とともに離合集散を繰り返してきたマヌーシュ共同体内部の社会関係のありようを大きく揺り動かす出来事である。交通・通信手段の発達した現代社会において空間の共有を越えてきた様々な人々のつながりやネットワークが現れているのは対照的に、マヌーシュの生活空間は定住化により縮小し社会関係の固定化が進む。「定住する移動生活者」として生きる現代のマヌーシュの生活世界は、それまで多数派社会の只中で自らの集団の自律性を維持してきた共同体の内と外の関係性を変化させているのであり、定住化の時代において人々の共同性や集合性をめぐる問題が従来とは異なったかたちで浮上しているといえる。

定住民社会の領土的共同体に属することなくその時々移動生活の状況に応じて柔軟に集団編成を変えながら共同体を構成してきた移動生活者は、時代の変容とともに一地域に定着を余儀なくされるなか、地縁というそれまで馴染みのなかった新たな社会関係のネットワークを基盤とする共同体を形成した。このマヌーシュの地域共同体は、定住化の進行とともにマヌーシュの生活空間が縮小されていく中で形成されていったものであるが、外的な歴史的・社会的条件に強い影響を受けながらも、依然として持続するマヌーシュ独自の集団構成の原理が今日の共同体形成に深く関わった。本発表では、地域共同体の形成過程において、従来のマヌーシュの集団構成の原理がいかに対応し、共同体の境界を組み替えていったのか、現在の共同体の様態にどのように作用しているかを検証することで、移動生活者社会における共同性のありようを考察していく。まず、マヌーシュの親族組織と婚姻制度を分析し、柔軟性と動態性によって特徴付けられるマヌーシュの集団構成の原理を示す。次に、地域共同体の境界や集団帰属の問題に焦点をあて今日の共同体をめぐる社会範疇や社会関係がいかなるかたちで再編されているかを検討し、そのうえで、マヌーシュ共同体が滲透性のある「血」の原則によりその枠組みを拡大したり境界を緩めたりして、日々更新される具体的な社会関係に応じて柔軟に編成されてきたことを明らかにする。さらに柔軟性の原理によってもたらされる成員の流動的な結合と分離がマヌーシュの社会関係に変化適応力を与え、またさまざまな近接集団に対する包容力を可能としたことを論じ、定住化の時代における移動生活者共同体の独自性を提示する。

【 定住化、地域共同体、親族組織、婚姻制度、社会範疇 】